

初期伊万里と鍋島

佐々木 英 夫

京都で、近世陶磁片の発掘例が報告されるようになったのは極く最近になってからである。その理由は幾つか考えられるところだが、まず、京都市内での発掘調査といった場合、目標とされるのは平安京跡の検出、確認であろう。しかも、京都市内の発掘調査では、ビル等の建設に伴う事前調査である場合が多く、特に時間的、経済的制約が少なくない。一方、京都市域は平安時代以来、日本有数の都市として人々の生活が続いており、その意味で各時代に対する考古学的考察の絶好の場である。しかし、それぞれの時代において、火事等の災害とその整地、井戸の掘削や家屋の建築等に伴い、前代の遺構を破壊しながら後代へと続いてきている。結果として、京都市内では近世の遺構は、甚だ錯綜しており、発掘調査で明確に遺構を把握できることは極めてまれである。ただ、近世の遺物については、完形で出土例こそ少ないが、その量的な面では断然他の都市での場面を圧倒する。しかも、平安時代ばかりでなく、中近世を通じて、京都は一大消費都市として国内外のあらゆる物資が集中していたわけだから、流通史や商業史の上からも、京都における考古学的発掘の成果が注目されていた。にもかかわらず、前述したように、京都での近年の発掘調査の成果は、他の研究分野に対して決して十分な情報を提供しているとは言えない。その理由としては、発掘調査の主眼が相対的に置かれていること、時間的、経済的制約それに、発掘調査員の専門分野による限定等が考えられる。

近年、平安時代のみに偏した発掘調査に対する反省が生まれ、室町、桃山、江戸といった、これまで比較的等閑視されてきた時代の遺構、遺物についても詳細な報告例がなされるようになった。話を近世陶磁器に限っても、愛知や佐賀など実際に陶磁器を焼いていた現地での窯跡などの発掘調査の成果と、消費都市としての京都での製品の出土例とが対応されるようになってきている。また、京都は文献類も多いので、発掘からだけでは限定できない時代判定についても有利であるばかりでなく、多種多様な内外の陶磁器が集中しており、近世陶磁史研究の宝庫である。

今回報告するのは、出土例の極く一部である。初期伊万里の二点は、残存が良好で、かつ、京都における伊万里の文献として重要な『隔賞記』に対応する資料であるし、もう一点の鍋島は、京都においてさえ頗る珍しい発掘例として紹介するものである。

九州有田で陶器が焼かれるようになったのは、一般に17世紀初頭と考えられている。その後、幾多の曲折を経て17世紀中葉からの隆盛の時期をむかえるわけであるが、普通『初期伊万里』と呼称される創業期の肥前磁器が生産された時期は、慶長十年（1605）前後から、寛永十年（1633）頃と考えられている。『初期伊万里』なる名称については、実際には有田郷とその隣接地域で焼成された磁器であることから、『初期有田焼』と呼ぶことを提唱された永竹威氏

の説があるが、小稿ではひとまず慣用的な『初期伊万里』なる名称を使うことにする。永竹氏の説による初期伊万里の特色を引用すると、成形の面から見ると、材質は磁器あるいは半磁器であっても、碗・皿類、瓶類などの成形技術は、古唐津的であり、施釉の技法や、工程も古唐津調であり、慣習とはいえ、高台裏に施釉のない碗・皿類もある。また、創業期の有田磁器の装飾絵文様は、創成当初の慶長十年前後から元和年間（1615～23）前後までは、比較的、李朝中期の染付磁器の単調な絵文様であるが、寛永初年前後に入ると、成形された器物の意匠形状は、李朝磁器の要素が残留しているものの、器形、釉調ともまったく安定し、絵文様は中国明末の染付磁器の影響を受けた複合文様が急速に導入され、やや複雑な文様表現となり、急に商品性が加味されていることは、注目すべき特徴である、とある。こうした前提で、初期伊万里を考えるなら、江戸時代の文献を見てゆくと、京都鹿苑寺の鳳林禅師が、寛永十二年(1635)から寛文八年(1668)までの間に書き綴った日記『隔蓑記』に『今利焼』という記事がある。

『隔蓑記』寛永十六(1639)年間十一月十三日条に『今利焼藤実染漬香合』と見えるが、これは『隔蓑記』に伊万里焼が記載される初見である。次いで、正保二(1645)年と同四(1647)年に一回ずつ記載が認められる。これ以後正保五(1648)年からは、伊万里焼の記事が頻出し、京都における流通ぶりがうかがえる。

本報告で紹介した初期伊万里二点は、丁度鳳林禅師が日記のなかで引いた今利焼とほぼ時期を同じくするものであろう。文様は、両者とも抽象化が進んでおり、明確に指摘することは困難であるが、前者は植物文様(秋草文か?)で後者は松文であろう。この時代の伊万里が中国の古染付の図柄を踏襲している事実は、矢部良明氏が報告しておられるが、ここで紹介した初期伊万里の図柄の原型と考えられる古染付の例は、管見では見当たらなかった。ただ、松文については、伊万里で類例がある。松文の皿は、口縁にいわゆる『縁紅』と呼ばれる仕上を施しているのも特色で、もう一点よりやや製作年代が下がるかとも思われる。いずれにしても、鳳林和尚が彼の日記『隔蓑記』に書き記した『今利焼』に対応する時期の製作と考えて大過あるまい。京都において、初期伊万里の報告例は極めて少ないが、これは出土例が少ないためではなく、前述したように近世陶磁器にまで報告者の手が回らないためである。現に寛永当時、稀少だと考えられる初期伊万里焼の遺物が、当遺跡だけでも数点検出されているし、急速に流通しはじめる正保以後の製作と覚しき伊万里磁器の破片は、京都市内のどの遺跡でも夥しい量が出土しているはずである。

近年、有田の現地で天狗谷古窯址、天神森窯跡、百間窯跡等々有田内山、外山諸地域での発掘調査が着々と成果を挙げているが、最大手の需要地であった京都で発掘された出土品との対応関係については未だ明らかにされていない。この問題は、我国の近世陶磁史の上で重要な課題であり、今後京都における近世の遺物にも、より重点を置いた発掘調査が望まれるわけである。

鍋島の染付皿1点も、近世の焼土中より焼瓦などと一緒に検出されたものである(第38図、図版第25)。近世の陶磁器類の報告例が、京都の場合非常に少ないことは既述したが、鍋島磁

器の場合、初期伊万里と違って、閑視されているのではなく、京都市内での出土例そのものが極く珍しいためである。元来、鍋島の製品は伊万里等と異なり、市販品ではなく、公家や諸大名への献上品の性格を当初より有しており、鍋島藩内の御用窯で贈答品として、あるいは鍋島藩諸用の調度品として特製されたものである。そのため、他の近世陶磁類と比較しても、特色が歴然としているので、鑑別は容易であると言える。鍋島の器としての性格は、会席膳用の食器に集約されており、その器形もいわゆる木盃形が殆どを占める。

今回の検出品は、『鍋島』の最盛期と思われる元禄期か、それ以後のものかと考えられる。なお、本例では、見込中央部に直径9.8cmほどの円形の傷がある。重ね焼の痕と速断することはできないが、あらゆる近代陶磁器の内、最高度の入念さで製作されたはずの『鍋島』皿の見込に、このような痕があるのは真に面白い。この痕は、部分的に釉切れを生じており、見込の中心とはずれているが、本品の高台径と一致する9.8cmの円形であることも興味深い。『鍋島』の発掘例は、前述した如く極めて珍しいが、比較すべき出土品が見当たらないため、ひとまず形式的な分類に依った。諸先学の御教示を乞う次第である。